

統一

第一百九十一號



目 次

日蓮聖人の理想

大僧正本多日生

從容事に當るの道

顯本大學教授關田養叔

報道

法華經講演集

(自二二八頁) 大僧正本多日生

聖語

唯我一人能爲救護と讀みながら大日をあがめ彌陀を信じ。
結句は釋尊をそしる。譬へば御方かたに入りて敵の旗をさゝば
御方と云ふべき歟。

乾坤一轉。梅花寒風を冒して芳を傳へ。天地自ら新たに。我が統一は茲
に十有七年の新春を迎ふ。

觀よ。興國の氣運鬱々乎として抑ゆべからざるものは我帝國の現状にし
て。正に建國の使命を發揮すべき好機運にあらずや。
我が統一は深く過去の歴史を自重して。さらに大なる責任の存するを自
覺し。一段の延禱努力を爲さんと欲する也。

願くは實在本佛の救護に憑りて。益々統一主義日蓮主義の本領を伸べ。
依て以て人類救濟の大業と帝國使命の遂行に貢献するあらんことを。

求道の士女に告ぐ

聖語錄講義

(時)毎土曜午後一時ヨリ四時ニ至ル

第一義會講演

(時)毎月第一日曜午後一時半ヨリ四時ニ至ル

妙教婦人會講演

(時)毎月十六日午後一時半ヨリ四時ニ至ル

この講演會には大僧正本多日生猊下御出演なされまして。佛教の真義日蓮主義の特長を懇説せらるゝのですから。道を求むるの方は是非お出なさい。一度び日蓮主義を味識致しまするならば。必ず煩悶懊惱を除いて安心立命を得まするは勿論。家庭も社交も圓満になつて法悅の境涯に入り。貴とき吾身の地位も價値も知るに至ることであります。

(處)淺草區北清島町十四番地

東京神田和強樂堂に於ける東洋大學橋香會大演說
會の講演也、文責在筆記者)

日蓮上人の理想

本多日生

私は日蓮上人の理想に就いて御話し申すのであります

すが、日蓮上人の理想などいふことを述べるのは、極めて大膽なことであります、然しが斯様なことをお話しするのも、多年、上人の教義に親しんで居る所から従來の研究と信仰とを披瀝してそれが聊かにても、諸君の御参考になるとがあるならば、道の爲めに慶ぶべき至りであります、若しも日蓮上人の御精神に違ふ様なことがあつたならば、甚だ慚愧に堪えない次第で、心窃に上人の照覧を祈つて居ります。

只今、境野君が申された通り、南無妙法蓮華經は、日蓮上人の理想の中心に相違ないが、全體、南無妙法蓮華經は、意義多端であつて短少の時間を以て、遺憾なく説き盡すことは極めて困難である、只今境野君は

南無妙法蓮華經に三種の意義あることを説明されました
が、何れも日蓮上人の御遺文に基いて説明されたので
至極結構な事であります、私はモ少し異つた方面から
説いて見ようと思ひます、然し矢張り彼の三の意義
の中に含まれるものと思ひますが、言葉の異つた方面から
聯か述べて見ようと思ふのであります。
法華經の中に妙音菩薩の三昧に十六の南無妙法蓮華經(一、妙悟相三昧、二、法華三昧、三、淨德三昧、四、宿王藏三昧、五、無縁三昧、六、智印三昧、七、解一切衆生語言三昧、八、集一切功德三昧、九、清淨三昧、十、神通遊戲三昧、十一、慧炬三昧、十二、莊嚴王三昧、十三、淨光明三昧、十四、淨藏三昧、十五、不共三昧、十六、日旋三昧)が擧げられて在ります、又妙莊嚴王の二子である所の淨藏、淨眼は七種の南無妙法蓮華經(一、淨三昧、二、日星宿三昧、三、淨光三昧、四、淨色三昧、五、淨照明三昧、六、長莊嚴三昧、七、大威德三昧)があるとして居ります、かく法華三昧も種々の方面から説けば、七種や十六種のみで

なく二十通りにも説かるゝ譯であります、一々それ
が南無妙法蓮華經の全部を説き盡して居る譯ではない
のであります、で今吾人が日蓮上人は上行菩薩の再誕
であるといふ方面から考へれば、日蓮上人の三昧に就
いても亦數々の義門があると思ひます、唱題三昧もそ
の一つでありませう、其他種々の形式に依つて表はさ
れるのであります、が、それが日蓮上人の理想の全體
を總括して居るといふとは言へないのであります、天
台智者大師の止觀の法華三昧も亦其一であらうが、こ
れは南無妙法蓮華經の智力的見解に外ならない、妙音
菩薩の十六の三昧も無論妙法の一部一部に觸れて居る
には相違ないが、それが直ちに其全體であるとは言へ
ない、如斯非常に意味が廣いのでありますから、僅か
の時間で、其全體を説き盡すことは到底不可能であり
ます、故に私は此中の一部ではあります、が、法華經妙
音品にある所の一の三昧を擧げて説明して見ようと思
ふのであります。

妙音品の十六三昧の中で、第十にある遊戲三昧に就

通りで表面より速斷すれば似たものが澤山ある、然し
其中に於ても上人の理想は特色を有つて居るので、同
じく現實主義といふも今日の所謂現實主義なるものは
上人の理想より見れば淺薄たるを免れぬ、日蓮上人も
ヤハリ現實主義であつたけれども、上人の現實主義な
ものは、多く有りふれた物質的野生的現實主義とは、
大に其趣を異にして居る、此點から日蓮上人の理想
を説くに不共三昧を以てすれば極めて解し易いのであ
ります。

例へば國を思ふとか愛するといふとに就いても、種
々あるけれども、日蓮上人の國を思ふ念慮は即ち此不
共三昧を透した観念で、世の多くの愛國とか忠君とい
ふのとは趣が違ふ、日蓮上人の愛國心は深き意義あり
根本ある不共三昧の特色を有して居るのであります。
昨日法華經講義をして居る際、此れと相似た様な話
が出来ましたが、それは陀羅尼品の所で「センダバ」とい
ふとを話したのであります、全體「センダバ」といふこ
とは、もと涅槃經に出て居る梵語であります、「セン

ダバ」といふとは、品物を指す場合に用ひる語で、これ
が種々に用ひられる、或場合は馬を持って來いといふ
意味になるし、或場合は鹽を持って來いといふとに
なる、又或は水を指していふ場合と、器物を指す場合
と、以上四種の意味に解せらるゝといふことであります、
で或國王があつた、其臣下に一人の智者ありて能くこ
の四種の意味を聞き分けた、國王が「センダバ」と云へ
ば、馬の御用の時は馬をつれて行くし、鹽の御用の時
は鹽を持つて行き、水の御用の時はナヤント水を持つ
て行き鹽の必要の時はまたそれに應じて一寸も間違
なく、其必要に應じて其品を持つて行くが他の大勢の
者は一向何れの品やら解らないといふ話がありますが
國家を愛するといふことも恰も此話の如く種々な意
義がある、皆愛國といふ點に於ては同じく似て居る様
であるが日蓮上人の愛國は甚だ異なる所があります、又
南無妙法蓮華經と唱ふるに就ても、日蓮上人も矢張南
無妙法蓮華經といふし、天臺も稽首妙法蓮華經といふ、
また南無佛陀とか南無達磨といひ、甚だ似て居る、然

し上人の南無といふ意味は、また一の特色を有して居ります。

只今迄、日蓮上人の博愛主義とか、法華的的生活を營むてうことを述べられた小林君の説に就ては、無論一言もないのであります。世に多く所謂宗教の精神とか博愛の精神などと言ふことに就いて一言して置かねばならぬことは、日蓮上人の博愛主義は道の爲にする一の策略であるといつて居るものがある、然し未だ日蓮上人の理想を正確に言ひ表はしたものでない、従つて吾人は本格的に日蓮上人の理想を研究して、上人の眞意の存在する所を發揮したいと思ふ、之に就いて私は私の考を述べる所以ありますから、宜しく諸君の御批評を仰ぎたいと思ひます。

日蓮上人は、實に能く日本國民の性格を發揮せられて居る方であると思ひます、即ち在來の日本國民の特徴を重んずること甚だ強く、従つて其理想は充分に國民の特徴を發揮せんことを主張せられた、此點より見ても日蓮上人の理想、主義を通さる國家に対する觀

念、即ち野生的國家主義の如きは、ドーしても眞に日本國民の性格を代表せる主張といふことは出來ないと思ひます、境野君が前に申された様に、戰國時代に於ける所謂英雄豪傑なるものは、盜賊をやつても何でもかまはぬ國を取りさへすればそれで可い、といふが如き、掠奪主義、侵略主義なるものは、即ち野生的國家主義であつて、日蓮上人の主義とは大に其趣旨を異にして居る所であります、一見非常に猛烈なる如く見ゆる所もあるが、其は根底に人を救ふといふ大慈大悲の精神の發現であつて、常に人を救ふといふ慈悲の精神と離れては居ないのであります、而して尤も國家に重きを置かれて居る、即ち日蓮上人が國體を重んぜられて居る精神は、一方に野生的國家主義の弊害欠陥を矯正し補はんとし、又一面には、佛教の弊風欠陥を正しくその特徴を發揮せんとする眞面目なる態度を以つて起きたのであります、従つて佛教經典を觀るに就いても、在來、殆んど迷信的妄從とでもいふべき、佛言佛語は悉く一言一句も服従すべしといふ思想を打破して

種々の欠點を捨てゝその特長を取り益々之を發揮すべく主張せられたのであります、一寸考へれば經典に対する態度が極て冷靜の様であるが決して左様でない、否此態度は佛教家として最も忠實なる考であります、今日の語で申せば、批判的態度であつて、古來種々の迷信や、習慣等の影響として佛教の中にもこれ等の從屬物を附着し來つて居る、之等に對して極めて公平なる見地に立つて批判的に看破し凡ての弊害欠陥を除き善美なる特長を發揮し、尙日本國民の特性を取り來つて之を結合せんと力められたのであります。

國民性の重なるものは、國家觀念に富めることでありまして、非常に團結心が強固であります、國家の爲めには自己を犠牲に供して迄盡力するといふ一種の道念を有して居る、一體日本民族は個人の職業上の道徳例へば商業道德の如き、往々道徳と一致せざることがあつても國家といふ上になると道徳的行爲を表現する特性を有つて居る、此國家といふ一の團體に重きを置くことは甚だ貴すべく又喜ぶべき事であります、如斯

此日本國民の有する性格に一の欠點があると思ひます、それは、皇室を中心として國家の統一を重んずる形式に於ては各人一致する所であるが、道といふ精神的統一の美點が欠けて居りはせぬか、即ち人たる已上は上下君臣俱に遵奉すべき一大道を中心とせねばならぬと思ひます、此の道たるや、眞に國家統一の中心となり、基礎となり根柢となり、凡べての政治や法律や教育や道徳や其他經濟の方面にも亦有る職業の上に於ても、此道が失却されたならば、到底圓満なる統一を永續して行くことは不可能であると思ひます、日蓮上人が立正安國論を著されたのも、畢竟此大道が國家に忘失されて居るのを慨歎して、道を思ひ國を愛するの念に堪えず、遂に筆に現れて一巻の書となつたのであります、即ち日蓮上人は如何しても此に國家統一の根本的中心となるべき、一大德教を建設せねばならぬ、この大德教に依つて人世を救ひ、而して永久に國家の統一平和を保つべきであると主張せられたのであります、これが日蓮上人の大理想であると思ひます、如斯

意義あり根柢ある愛國の精神でなければ、如何に國家の爲めといひ、博愛と叫ぶも、それは盲目者皮相の見解たるを免れない、此道を忘却されて居るといふ一の大欠陥は、孔孟の道を以つて補はんとし、倫理學の方面から充たさんとしても、尙絶対に満足し得ることは難いと思ひます、今日既に識者の間には、國家統一の上に何等かの欠陥あることを認め之れに對する種々の方法も講せられつゝあります、吾人は、誠心誠意、先づ以て道の統一點を認め、國民凡て此道に進まねばならぬと信するのであります、即ち先王の道といふことは出來ない、劍の光や、金鏡の力では永久に國の光を輝かさんとするが如きは、未だ眞の大主義といふ相違ないが、もつと高尚偉大なる大德教が有ゆる凡べてのものゝ中心とならねばならぬと思ひます、日蓮聖

想を實現する目的を以て、如何なる迫害をも排して、假令、千萬人と雖も我れ往かんとの確信があつたならば、必ず其理想を實現することが出来ると信するのであります。

更に國民の特色として考へべきことは、國家の發展に就いて、あります、全體日本國民は非常に發展性に富んで居る、從つて佛教も我國に來てから此傾向を有して居ると思ひます、前に境野君も申された通り、支那に於ける佛教は何となく陰氣な、消極的な、且つ未來觀に傾いた思想を帶びて居つたが、日本に傳はつてから其思想が著しく變化して、何となく陽氣になつて來たのであります、殊に東京の如きは、極めて陰氣な念佛宗の如きのも、自然陽氣になつて居る、一體に日本人は陰氣を嫌ふ性質を有つて居る様であるが、之れが廳て國家の發展性となつて居ると思ひます、此發展性を有して居る我國民は、日清戰爭の結果臺灣を領し、日露の役で樺太を有し、今まで朝鮮を併合したが、之れで已に満足して居るかといへば決して左様で

人は、傳教大師の力に因つて、王法佛法の冥合を實現したのを非常に喜ばれたのであります、尙舊に王法佛法が合したといふばかりでなく、此上また精神界を統一すべき大德教を建設せんことを理想せられて居たのであります、然るに或者は、斯かる事は一種の空想に過ぎない、到底行はるべきことでないと言ふかも知れぬが、之等は淺見者流であつて取るに足らないのであるが、假令學問を以つて國民の精神を統一せんとしても、學問や理論を以てはドーしても思想界の統一は極めて困難の様に思はるゝけれども、實際これを行ふを造るとは出來ない、佛教の所謂道念信仰が進まなければならぬと思ひます、一寸考へれば精神界の統一は一切法律に任せて置けば可い、大德教なんといふものを建設しやうと思ふが如きは絶望であると考へて居る者は、日蓮上人の理想は到底會得は出來ない、然しそれはホンの表面だけの考察であつて、實際にこの理態度も積極的であります。

發展性は日本人の特色であります、之にも亦一つの缺點が伴つて居るのであります、即ち理想が缺けて居る傾向がありはせぬかと思ふ、單に發展をと言つても、其奥底に、理想のない發展は殆んど無意義に歸するのであります、朝鮮併合に就いても何の爲めといふ理想なく、只日本の面積を擴張する目的のみであつたならば、殆んど無意義なものであります、又、國防策として併合したとすれば只外交的必要に資すべき價值あるのみであるが、然しそかる狭い淺薄な考から併合されたのではあるまいと信じます、正直に言へば、我日本帝國の今日の境遇は、世界列強國と相伍して行くのみでなく、他の文明よりも超越せる文明と力を有せねばならぬ、從つて日本國家の理想は極めて深遠なる

意義を有せねばならぬと思ふ、即ち道の爲に國家を擴大するを自覺せねばならないのです。

若し利の爲め、武力の爲め、日本を擴張するとすれば、それは禽獸猛狼の理想と何の選ぶ所もあるまいと思ふ、故に物質的利益にのみ流れ、武力的威光にのみ走つて、神聖なる正道を疎外して國家の發展を期せんとするが如きは誤謬も亦甚だしく、眞に國家の意義を識得せざるものといはざるを得ない、一寸考へれば、太だ迂遠でありマラス様に思はれても、永久に存續すべき最後の勝利となる所のものでなければ、眞の理想とするに足らないものであります、日本人は多くハニア理想を有つて居るけれども、其れと共に剛健正實なる精神と不朽の大道を提げて正しき信仰の上に立たねばならぬ、然らば何に依つて此理想を實現すべきやといふに、即ち道に依らなければならぬと思ふ、我國には、誇るべき皇統一系億兆一心の精華を有して居るが若し正しき道といふものを失つたならば、如何に國家が發展擴張するとも、それは一時的野生的發展であ

望の爲に煩悶するに至るのである、此缺陷を補ふには健全なる宗教の信仰によらなければならぬ、此健全なる信仰は、凡ての考慮活動の原動力となるものであります、この完全なる信仰を得て居る者は極めて稀であります、この完全なる信仰を得て居る者には極めて稀であります、從つて國家に對する見解もその態度も甚だ不透明に了つて居る、今佛教に就て、此事を一言すれば、博愛平等の思想は、佛教の有る經典に現れて居るけれども、日本國民の特性たる愛國の考は現れて居るかといへば殆んど統まつた思想はない、朝夕の修法に武運長久國家安泰を祈る位のとであつて、未だ真に國家の發展を意識し之を實現せんと力めて居るもの和されて居ります。

我日本國に於ては、支那より受けた思想や、或る種の神道主義のみでは帝國の天職を發揮せられない、如何に萬世一系を誇り億兆一心を美とし、また富士の岳

ると思ひます、寧ろ之は墮落といふべきもので眞面目なる永久的發展といふとは出來ない、日蓮上人は常に道を重んじて眞の發展を理想せられて居たのであります。

更に日蓮上人は現實的であつたが、日本國民の特性として亦此思想に富めるとは其特長であります、この現實主義に就いては、既に境野君の説で明かで、一言も申すべきとはないのですが、凡そ現實主義には、一の根底がなければならぬ、若し根底なき現實主義とすれば、只生きて居る間の勝負といふ様な考へとなるので、或は金錢を以て満足するとも出来るであらう、また凡て物質的欲求を充すものがあれば其れでも満足が出来よう、然るに人はどうしても單に物質的要求のみに満足することは出来ない、茲に高尚なる理想を捉へ來つて現實に接觸し融合する所がなくてはならぬ、此調和は人生に取つて最も必要であります、然しへかにやれば此現實主義は所謂卑近淺陋なる思想に陥る恐があります、即ち金錢の奴隸となり、物質的欲

『法は必らず國を鑑みて弘むべし、彼國に好かりし法なれば此國にも好かるべしとは思ふべからず』(十二
南條抄)

此日蓮聖人の言は、所謂不共二昧の特色の存する所で如來の説法は是非善惡の辨なく絕對的に服従すべきものであるといふ信仰を否認して、先づ『必らず國を鑑みて弘むべし』といつてムヤミに弘めても効果なきことを説破されて居る、在來の有りふれた僧侶の頭腦とは大に其趣を異にして居ります、而して我日本國を億兆一心の國體の上に世界に超越せる大德教を建設し大信仰を起さしめんとの大理想を提げて、實に世界に卓越せる國家たらんことを期せられて居つたからであります。

を仰ぎ櫻花の美を誇つても、單にそれのみでは日本の根本的價値ある所以とは言へない、即ち思想上に誇るべき一大特色を有しなかつたならば、如何に日本が外形的に擴大してもそれは他に誇るに足らないものと思ひます、日蓮上人は此點より大佛教の建設を以て理想とし大なる抱負を有つて居られたのであります。

更に佛教の一長所として見るべきものは、哲學的思索に富んで居ることであります、從來これは却つて一の短所となつて居つたのであります、即ち此哲學的思索に偏して殆んど社會と沒交渉の状態となつて何等人世に貢獻する所なき有様に至つて居つたのであります、此に於て、日蓮上人は法華經の意義を味識し、此法華經を以て全佛教の統一的中心點となし、有ゆる弊害を除き去つてその特長を發揮せんと力められたのであります、全體日本人の思想としては、單に冥想的思考や哲學的思考に耽つて、坐禪の如きことをなしてそれで満足は出来ない、尤も昔は禪定を修した人もないではないが、それはホンの佛教の一部分のみで寧ろ

及ばぬ所であるといふのであります。

かくて日蓮上人は、實に能く現實と未來との問題を解決し調和されて居ります、娑婆即寂光といつても、只理論的に冷かに考察して寂光を打ち消してしまふ様な論法とは大に其趣に異にして居る、また所謂即身是佛といつて吾人は直に佛であるといふが如き理論上の考察とは大に異なる所があるのであります、即ち超絶的理想と現實的理想とを圓満に調和し、此深き根底より發現して「女房と酒打ち飲んで南無妙法蓮華經」といはれたので、單なる現實主義ではない、活ける信仰があり靈界の光が現實に融合して眞に人生に價値あるのであります、此活ける信仰の力によつて自己の住所も亦意義ある活動の舞臺となるのであります、日蓮上人が「釋尊の住み給ひけん鷲峰を我朝此極に移し置きぬ」と言はれたのも此信仰の靈力が籠つて、それより發露したのであります、即ち精神的に身延山は淨土であると信じて居られたのであります、要するに日蓮上人は超世的理想と現實的理想とを圓満に調和し

武士道の中にに入るべきものでありませう、日蓮上人が開目抄に「迦葉の入定も時にこそよれ」と云はれて居るが、實際坐禪入定も時に依るので、今未法現代の如き時に於て、其等冥想的思索に耽つて居る場合ではないのあります、故に日蓮上人は時機に鑑みて烈しく叱咤し現代の如き思想界の欠陥を根本的に補ふべき一大德教を建設して以て國民一般の向上自覺の精神を奮起すべく促されたのであります、現代に於て高僧碩徳と仰がれつゝある僧侶が自己の本務を忘れ疎忽として何等爲す所なく、而も平然慚づる色なき者あるを、若し日蓮上人が觀られたならば、如何に叱責せらるゝであらうか、極樂百年の修行は穢土一日の功德に及ばず」と日蓮上人が宣はれた語は、實に能く此間の消息を道破せるものと思ひます、即ち此世の中はウルサイ如何かして此ウルサイ世の中、面倒臭い世の中を離脱したいものだといつて醒解して居る様な者が、假令淨土に至つて百年の修行を積んでも、現實に於て眞面目なる眞の活動をなして居るものゝ一日の功德には到底

人世の活動に意義あらしめて居るのであります、只理論的に三諦圓融とか三無差別とかいつて相即を論じて其理論が現實に活動すべく力を與へなかつたならば所謂鳩の空々鼠の即々と何等撰心所がない、故に日蓮上人は佛教の哲學的思考冥想的思索より来る弊害を除かんとして此欠陥を擧げられて居ります。斯の如く日蓮上人は國民性の特長を以て佛教の短所を補ひ、佛教の特色を取り來つて國民性の欠陥を補ひ完全なる一大特色を發揮せんことに力められて居るのであります、佛教徒が佛教の特色として如何に多く種々なことを罪列した所で實社會と沒交渉でありと認めるることは出來ないのであります、此に於て、完全なる國家を建設せんとするならば、先づ須く完全なる國教を建設すべきであります、日蓮上人の理想は實世界を疎外したものならばそれは活ける佛教の特長に越に存するのであります、個人としては特に一定の理想を與へなくとも、國家團體としての理想目的を確定して之を一般國民に與へ、皆此理想に向つて進み舉

つて向上發展の針路を開いたならば國家其ものゝ完全は期せずして明かであります、斯くするには國家の爲政者當局者が其任に當つて立派なる信念を與へなければならぬと思ひます、然るに國家として之を與へないで、國民の向上發展を欲求しつゝある事は、甚だ矛盾したことと思ひます、吾人は此混亂せる思想界にどうしても理想的な大信仰大道念を與へなければ満足し得ない、遠くは釋迦牟尼世尊の如き近くは我日蓮上人の如き御方が、國家社會の爲めに世に出現して居られる、而して人生に光あることを以て教へて居る、假令金錢を以て賄はんとしても之は到底求めるることは出来ないことである、それを佛教は僧侶の研究すべきものであり日蓮は日蓮宗の專有物であるかの如く思つて居るのは甚だ誤れる考であります、其言動が凡て國家社會一般の人類に對して出て居るのであります、故に吾人は須く其特長を取つて向上發展に資すべきであります。全體、國家が國民に與ふる精神問題は、極めて強き刺激を與へ印象を深からしむるものであります、故に

今此理想を證明すれば三大秘法抄(遺二〇五三)の戒壇建設の文がそれであります。

戒壇とは、王法佛法に冥し、佛法王法に合して、王臣一同に本門の三大秘密の法を持ちて、有德王覺徳王の其の昔を未法濁惡の未來に移さん時、敕宣並に御教書を申し下して靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立すべき者歟、時を待すべきのみ、事の戒法と申すは是也、三國並びに一闇浮提の人僧悔滅罪の戒法のみならず、大梵天玉帝釋等も來下して贈み給ふべき戒壇也。

此文の中には種々の理想が含まれて居りますが大體四つあると思ひます、即ち王法佛法の冥合と、事の戒法と、懺悔滅罪と、大梵天玉帝釋等も來下して贈み給ふべきことであります。

先づ日蓮上人は佛教の特長を發揮して王法佛法の冥合調和を理想とせられて居つたことは既に前にも述べた通りであります、事の戒法に就いては、日蓮上人が宗敎統一を理想せられて居る意義が充分含んで居るの

現代思想界の欠陥を補ふには、國家の事業として、億兆一心の稱すべき美點あると共に、尙國家統一の根本的基礎となるべき大德教を建設して、此欠陥を補ひ弊害を除かなければならぬと思ひ、日本には富士山がある櫻がある君子國であるといつて誇るのは却つて危険なる思想と思ひ、之等を以て幸福と心得て居るのは所謂質的理想であります、斯んなものよりモット高尚な眞誠ある大德教を以て誇らなければならぬ即ち國民として健全なる靈の食となるものを有せねばならぬと思ひのであります、此大德教大宗教なき國家は、恰も家に柱石なきが如くであります、此道といふものなく人間を中心とした國家とすれば何人が來てもヘコ／＼頭ばかり下げて居なければならぬ、日蓮上人は如何に道を重せられたか、而も上人が理想する所の道は上下共に之に從つて國家の統一を保ち國家の發展を計り國民の向上に偉大なる力となるものでなければならぬ、即ち王法と佛法とが調和されて其上に大德教を建設することが日蓮上人の理想であつたのであります、

であります、國家には一の權力、生命があつて萬民を支配すべきであります、只國民を犠牲に供することが權力ではない、一の大德教が其生命となり統一すべき中心となつて圓滿なる統治を保たなければならぬ、然るに信教自由を以て文明の如く思つて居るのは大きな誤りであると思ひます、教育や産業の方面に干渉する國家が思想界の中心となるべき信仰を放任して精神界の統一を輕視して居ることは非常に慨嘆すべきことで、現代思想界に大なる欠陥を來せることも亦必然の理であると思ふのであります、聖德太子が三寶に歸せすんば何を以てか其曲れるを直さんと申されたが、實に深く味ふべき至言と思ひ。

次に一闇浮提の人の懺悔滅罪といふことを言はれて居るが之は只一人や二人の懺悔滅罪では國家の發展に資するに足らない、國家全體の大懺悔をしなければならぬとの意味であります、よく世間では宗教と法律との衝突を口にする人があるが、之は宗教といふよりも寧ろ基督教といふべきことで佛教の意義から申せば決して

衝突を來す様なことはない、殊に法華經の上から觀れば極めて能く調和せられて居るのであります、故に日本上人は國家の力と大なる德教とが結合して此に一の偉大なる靈光を認めて居られたのであります、國教が苟も基督教や伏羲神農の教に依る如き事では到底國家の統一は保ち難く又進歩發展は期せられない、どうしても此に一大德教の建設を俟つべきであります、凡ての懺悔滅罪は之に因らなければならぬと思ふのであります、全體日本人が、神道を無上の道であると心得て居る守屋の如き思想は、實に保守的消極的思想であつて、日本の發展といふ様な進取的積極的精神を有しません、即ち活動力を失つた者といはなければならぬ、日蓮聖人は常に國家の發展と國民の自覺を促すべく大德教の建設に努められて、之を極力主張されたのであります、今日既に朝鮮が我領土に歸し、教育や政治等を益々完全にすべき必要あると共にまた宗教の完全なるものが大に必要であります、日蓮上人が國家の安寧秩序を保たんとするならば先づ須く信仰問題を統一す

要するに日蓮聖人が國を論し道を論するには以上述べた様な絶大なる理想より發したのでありますて、多くの人が常に言つて居ることと非常に能く似た所がありますが然し所謂不共三昧で、其根底に於いて大に趣きを異にして居るのであります、故に若し日蓮上人を研究せんとする人は先づ聖人の理想が那邊にあるかを確めて其眞意を會得すべきであります、また日蓮聖人を信する者は須く此大理想を發揮すべく奮闘せなければならぬのであります。

從容事に當るの道

(日蓮主義青年會講演、吉田堅晴筆記)

關田養叔

私の演題は「從容事に當るの道」と申ます、之は昔から漢文には「從容迫ラズ」^スとありますて、從容とは、其の字義の委しいこと知りませぬが、寛りとして、アハテズ、コセツカズ、然も本氣で事をやる様な意味合に、用ひられて居る様に思ひます。

べきであると呼ばれて居る、而して國民の心靈界の統一は非常に重大なる事で、如何に大なる戰争よりも尙重視せられて居つたのであります、されば此に最上完全なる大德教を立てゝ一天四海に廣宣流布せしめ、末法の人類、物して一闇浮提の凡ての人類は此大德教に依つて安心立命を得べきであると主張せられたのであります、支那に於て忠孝といひ印度に於て解脱涅槃といひ各々其道とする所があると同じく我日本に於ては尙其以上に大德教を設けて國家の理想を發揮すべきであります、無論忠孝等の道が必要であることは今更言ふ迄もないことであるが、國家の理想としては大德教に依らなければならぬ、忠孝五倫の道の如き有る倫理道德や教育政治其他凡てのものは各々最後の歸趣を一にしなければならぬと思ひます、然しあくするには、統一の中心點がなければならぬであります、日蓮上人は之等凡てを總括し統一すべき根本的中心となるものは即ち此大德教にありとの理想を有つて居られたのであります。

禪宗では從容錄と云ふ様な書物までもある、私は其内容は知りませんが、字の意味から推して考へると、事に當つて驚かず騒がずやる様な意味の事を書いたのはあるまいかと思ふ、又禪宗でこれを悟道の一つと致しまして……悟り過ぎちまつて何だか間がぬけた様になつたのもありますけれども……兎に角ノンビリとして事に當るを禪機といふて、修養の一に置て居るようであります。

昔の英雄豪傑等が事をするにも、矢張り斯う云ふ心持で、着々其事に當つたようであります、曾て大石良雄であつたと思ひますが、「慷慨死」に付は易く、從容義に就くは難し」といはれたが、之は人として能く悲憤慷慨といふ様に、世を憂ひ、涙を振ひ血を灑き身命を捨てゝ進む事は易いが、能く物の前後を考へ、義の趣向更に無しと云ふ迄に、用意周到の態度を以て、事を行ふことは難いと云ふ意味であります、が、大西郷の如きも晩年には逆賊の名を取り、兎角の議論批評もありま

したが、彼の維新の革命に當り、王政を復古し、萬世一系の天皇の御代となし上へた功績に就ては、決して彼を除さ去る事は出來ない。大西郷の態度は左程花々敷はないが、併し事に當つては從容迫らざるの態度であつた様に思ひます、彼は王陽明の修養があつた人で曾て斯う云ふ事を言つて居る、「金もいらぬ名譽もいらない命もいらぬといふ心を以て、天意を行ふといふ人間は、俗物より見れば到底利用することが出来難いで誠に困ったものだと、これは金で事をする者は至つて左近し易い、名譽心の強いものは御し易い故に一面から見れば前者は坂ふ上に於て非常に困るが、併し一朝事あるの時に方ては、斯る人間でなければ本當の役には立たぬ天意を行はんとするものは天道を辿つて進むのであるから、名譽や利益は天道を行ふに關係ないのであると云ふ意であるが、此言葉は西郷彼れ自身を説明したものであらふと思ふ、彼は至てポンヤリした男で、少年から青年にかけての時代には、辯舌も軸辯で、大將となつてからも、餘り花々しい議論も吐人であると思ふ。

世の中では活氣のある花々しい事も必要ではあるが私は夫よりも世の毀譽褒貶に關せず、天を怨みず人を咎めず、泰然自若として事に當り、天を樂み道を悦びつゝ進む人が、最も必要であると思ふ。

先般三宅雪嶺博士が岡山の日蓮研究會で云はれた事が「統一」誌上に載つて居る、其中に現代の人には智識も必要だが、特に勇氣が必要であると云ふて居らるが、實際事に當つて奮然驅起して、如何なる艱難にも堪へ忍んで遂行する所の所謂勇氣とか決斷力忍耐力なるものは最も必要で、無論人としては智識も大切ではあるが、只物識り丈では何の役にも立たない、現代學生の成行を見ると、書生時代には實に悲憤慷慨で、中學時代は最も花々しい時でありますが、高等學校位になると少しく此氣概が衰へ、大學に入り卒業する頃になると、全く一變して平々凡々になつて丁度のが、

かす、主として、人の言ふ事を聞く方であつた、彼が青年時代に、天下に於て我が歎を乞ふべきものは、藤田東湖一人であると信じて、一日其の塾を訪めた、そこで當時の西郷吉之助、門人たらんが爲に態々參つた由を語ると、取次の下女に言ふて暫時玄関へ待たして置いた、やがて吉之助大の字になつて高齢で寝て丁度、東湖先生此の體を見て初めて來て門人とならうともする者が、だの字なりに玄關で寝るとは甚だ怪しかも知れぬが、大の字なりに玄關で寝るとは甚だ怪しかも知れぬと、ゆすぶり起して見た處が、馬鹿の様でもあるが、多少天下を經営するの才幹をも有する、何しろ物に落付はある奴だから、或は事をなすに足るかも知れぬと、これが爲に却て愛したと云ひます、私は此に彼の特長も分り、又從容事に迫らぬ心があつたのであると思ふ、維新的功勳者として、橋本左内、或は梅田雲濱とか、慷慨の士として名高き雲井辰雄等も皆明治維新に缺くべからざるの勇士ではあるが、西郷、大久保、木戸の三名は維新的三傑と稱せられて、戰亂

かと云へば、信仰が基礎であるのであります、此信仰なるものが實際に現はれ來りて、從容迫らざる態度となり、隨て勇氣も決断も、其他總ての働きも皆此中から出るものである、「從容迫らす」とは、之を日蓮主義より觀察するならば、法華の大信仰に依りて鍛錬せられたる、強き意志力と、之に依て得たる歡喜法悅とが、合致して、事々物々の上に働く、活ける信仰狀態を言ふのである、そこで日蓮主義とか或は又日蓮魂と云ふのは如何なるものであるかと申なれば、法華經の信仰を基礎にして從容事に當るの精神であらうと思ひます、即ち上人に依て實行せられた活ける法華經的信仰がそれであると思ふ、此の從容的態度が、取りも直さず身讀法華で吾人も常に茲に至らんことを欲するのである。

吾人が今日讀める法華經は釋尊に由て説かれ、三國の僧俗に渡つて讀まれた、日本に於て婦人では清少納言とか紫式部等も讀れたでありませう、けれども尤も能く法華經を讀で實行せられたのは、日蓮上人である

りますが、今上人のお言葉によりますれば「三途に憚りなく、七難に恐れなし」で、未來に死して何うなるとか、之で死んでは情ないとか云ふ様な事は、腦中にならないのであります、若之がありとすれば尚三途に憚ある譯であるが、上人には未來の世は、即ち大向上を爲すべき大なる現在である、されば一度法華經の信仰に住すれば現在未來ともに赫々たる光明や希望を以て満たされ、未來の地獄、餓鬼、畜生の三途にも憚かりなく現在に湧き来る七難にも恐れなき、太平無事な世を送る事が出來るのであります、上人の御一生殊に延山御勇退後の状態を見るに、誠に羨ましい御生涯であらせられた「立ちわたらる身のうきくもゝはれぬべしたえのみのりの聲の山風」とは上人の心を詠せられたもので、之は法華經の如風於空中一切無障礙の文に基き、風は至る處に遍滿し、如何なるものにも障へられないが、日蓮も今迄數多の迫害を加へられ艱難はあつたものゝ悉く踏破し來つて、今は苦痛も心配もない誠に平和である、うき雲は憂き苦もと通はせられたも

上人の御一生は常に從容迫らざる態度で、有ゆる迫害に堪へ、然も我主義を遂行せられた、然し世には迫害に反抗する人は多くありませうが、迫害に對して超然たる人は極めて少い、博徒肌のものは澤山あるが、迫害以上に立て行く人は少い、上人は其當代の爲政者を始め、至る處で迫害を加へられたけれども、之を迫害とも仇とも思召されず、却つて恩義なりと感謝して居られた、迫害を加へても果して夫を受て居ないか、痛いか痛くないか少しも分らない様な風で、心は常に泰然自若、平和を以て終始一貫せられた、斯う云ふ風でおりましたから、上人の人格は益々上り、迫害者に對しても相手にする様でもあれば、せない様でもあると云ふ風で、實に超然として世俗を脱して居られた、眞に法華經の「遊行に畏れなきこと師子王の如し」の有様である、之を味へば上人が如何に從容事に當るの風があらせられたか、容易に了解せらるゝであります。無量義經には「生死の喰道に處して恐れなし」とあ

と申ますが、決してさうでない、どこ迄も道を守り、目的に努力せられ、一天四海皆歸妙法の實を舉んが爲に、態々斯かる御不自由を忍んで山中に住はれ、徒弟の教養に御熱心なされ、又其お書になつたものゝ多いのに徴して見るも明かに分る、彼の身延記に「晝は終日一乘妙典の御法を論談し、夜は竟夜要文誦持の聲のみす」とあるが如く、絶えず大なる目的の爲めに奮闘しつゝあらせられた、上人は其目的頗る遠大で、却々一代にはやり切れない程だ、始め建長五年四月二十八日宗旨御建立より延山御隱栖に至るまで、此法華經を一闇浮提の衆生に與へ、世界を擧て、法華經の恩澤に浴せしめたいとは、其思召であつた、従つて上人は先づ日本國全體が法華經を信するの時が必ず来るであらう、更に進んでは、天下萬民此一佛乘に歸するに相違ないと思召された、故に諸法寶相抄には「天下萬民悉く法華經を信するに至らんこと、大地を的とす」と仰せられてある、斯る大目的なれば上人は延山に於ても樂隱居どころでない倍々奮闘せられ、努力せられ經を講じ

龍の口では四條金吾が、上人の死刑に處せられんとするに方り、慷慨禁する能はず血涙迸るの時、上人は「不覺の殿原哉」と大喝一聲叱咤せられた、四條金吾は師弟の情とし、將又日本國の將來を憂へ、上人に對する赤心より萬感交々起り、此に血涙を灑がれたのである、曾て上人は四條金吾に向ひ、我上行菩薩たるのである、汝は安立行菩薩である、不惜身命に大法の爲に盡さるゝ其心は、日蓮未來永遠忘れないと仰せられたのが、併し上人の心は死を眼前に控ゆるの時も情に溺れずして從容として「之程の喜を笑へかし」と仰せられた、然して幸か不幸か龍の口には其難を免れ給ひしも、直ちに佐渡流罪と云ふ事になつた、一難去れば一難來ると云ふ風で、一波萬波迫害は暫しの間断も無く其身邊に集來したのであります、此時通常のものならば大抵氣折れがするが、上人は毛頭さう云ふ事は無つた、後の有名なる本満寺御書によれば、「今更なげくべき事にあらず、潮は干て満ち、月はかけてみつ」と仰せられると云ふ

とあつて古往今來流罪せられし人は澤山あるであらうが、我の如く法華經を身に讀み味ひ得て、悦び身に餘れるものはよもあるまいと、法華經の光に懷かれ大慈悲に覆はれ、永遠の生涯を佛陀の救と法の光の中にみ雪中破屋住居も、艱難である苦痛であると感せられざりしのみか、時々刻々成佛の理を味ふと云ひ、我等が如く悦び身に餘りたるものよもあらじと、無限の法悅を以て月日の立つも知らずに過させられたので

と申ますが、決してさうでない、どこ迄も道を守り、目的に努力せられ、一天四海皆歸妙法の實を舉んが爲に、態々斯かる御不自由を忍んで山中に住はれ、徒弟の教養に御熱心なされ、又其お書になつたものゝ多いのに徴して見るも明かに分る、彼の身延記に「晝は終日一乘妙典の御法を論談し、夜は竟夜要文誦持の聲のみす」とあるが如く、絶えず大なる目的の爲めに奮闘しつゝあらせられた、上人は其目的頗る遠大で、却々一代にはやり切れない程だ、始め建長五年四月二十八日宗旨御建立より延山御隱栖に至るまで、此法華經を一闇浮提の衆生に與へ、世界を擧て、法華經の恩澤に浴せしめたいとは、其思召であつた、従つて上人は先づ日本國全體が法華經を信するの時が必ず来るであらう、更に進んでは、天下萬民此一佛乘に歸するに相違ないと思召された、故に諸法寶相抄には「天下萬民悉く法華經を信するに至らんこと、大地を的とす」と仰せられてある、斯る大目的なれば上人は延山に於ても樂隱居どころでない倍々奮闘せられ、努力せられ經を講じ

法を談じ、常に從容迫らざるの態度で貧苦と戰ひつゝあらせられたのである。

今日の人を見るに多くは、金でも出來ると先づ別荘を建てる、美衣美食を貪る、學生ならば學校卒業する新婚旅行、夫れから成功とか何とか胡麻化して、それで終局となるのが十中の八九であるが、上人の目的は斯かる富貴とか、名譽とか權勢とか云ふ様なものではなく、天下萬民を悉く妙法の民としよう、如說修行抄にもある如く、世界を平和の國にせなければならぬ、一思召された、故に諸法寶相抄には「天下萬民悉く法華經を信するに至らんこと、大地を的とす」と仰せられてある、斯る大目的なれば上人は延山に於ても樂隱居どころでない倍々奮闘せられ、努力せられ經を講じ

天四海皆歸妙法の實を舉ねば止まぬ、之は又必ず出来得べき事であると、堅く信じて居られた、上人の一代は、終始一貫、奮闘努力であつて、又一方からは從容迫らすの態度を持續したるものである、曾て伊東に流罪せられた時の如きも、鎌倉にあつて諸宗の人法を折伏したる時も、常に法華經を身に讀ませて居たので、伊豆の伊東では日蓮は流罪中二六時中此法華經を讀誦するに足らずと遊ばされ、佐渡雪中流在の身で破屋三昧堂の中に、露命を繋いであらせられながら門をば晝夜に沙汰し成佛の理をば時々刻々に味ふ……切初より以來父母主君等の御勘氣を蒙り遠國の島に流罪せられし人々我等が如く悦び身に餘りたるものよもあらじ（最蓮房）

ある、之等の事は畢竟何が根底となつて出たかと申ますと、上人の大なる信仰が基礎となり、從客事に當られたのである。吾人は今日何程念佛無間をやつても流罪せられない、死刑の宣告を受る憂もないが、上人の時々剰々味あはれた様な此信仰は、實生活に移して味ふべき必要があると思ふ、吾人は偶喧嘩をうられる、或は人から中傷せられた時杯は、此從客事に當るの態度がとれない、雪中處でない普通の世に處して奮闘力が失せ易い、學生が中學に入り進んで高等學校大學と云ふ順序で行く、すると、愈々益々圓らざる障壁や迫害が出て来るものである、故に此場合に於ては、上人は彼れ程の難難に堪えられた、苦痛も忍ばれた、のみならず無限の法悦を以て満されて居た、されば吾人も亦難難に遭遇する度毎に、上人の當時を懷ひ浮べて行く事は、大に参考となる事ではなからうかと思ひます、上人は終始一貫して從客事に當られたが、夫は上人の信仰其ものが然らしめたものであると云ふ事は前に述ましたが、龍の口に於て其難を免れた時、月の満れ

の信者としては何時も從客事に當られたので、佐渡から歸られてより以來は、人皆迫害を加へる事を恐れ、迫害は此に全く止んだ、其時に上人は日蓮三十餘年の間朝に夕に法華一人の成佛を絶叫し、夫が爲に迫害に日夜々に重さなり、四方は敵人を以て満されては居たが、今日之を打破つて世の爲政者も尙迫害を加ふるものを見るに至つたのは自己の忍耐力奮闘力が致せるのを恐るゝに至つた。經の信仰によられたもので、「靈山淨土の釋迦牟尼佛等顯に加し冥に加せんば、一日も安穩なるべしや云々」とて、日蓮今日ある所以のものは、常住の佛天三寶の守護の力なりとして居る、決して上人自ら勇氣があつたとか、健全であつたと云ふて誇つて居ない。

人が餘りに小事にアクセスして自己の力のみで凡てを解釋せんとし、區々の心配を爲して、小智に支配せられ、これが爲めに、信仰が生活上に輝かない、これではノンビリした心を持てない故に法華經の信仰を基礎とし、從客事に當るの態度を以て、小心配に心を奪は

ばかけ、潮の干て満るが如くであると云はれたのみならず、慈父大覺世尊代らせ給ふと、無限の感概に打れ釋尊が予に代つて下さつたものであると思召され、反對者よりは迫害を加へたと思ひの外、上人自らは迫害に打勝ち軍凱歌を奏せられたのである、更に佐渡雪山には「教主釋尊衣を以て覆はせ給ふ」と云ひ、「梵釋二天も來て我を守護してくれる」と仰せられた、又上人の語に「身に詐親なく、一切此身を法華經に任せ」とあって、身に詐親なくとは主義を異にしたものに詐り親まず不屈不撓に爲すべきことをなすの意味で、上人は其態度は極めて明白で、夫が爲に前途が何うならうが、少しも顧慮する事なく一切を法華經に任せられ信仰を以て立ち、我身をば佛陀の救濟力と自己の信力中に没し、常に慾々自適法悦の境に住せられた、其態度は實に今日羨望に堪えない、併し時は六十餘州に五尺の體の置場もないと迄いはれた事もあるが、心は常に平然として快活の境にあらせられた。勿論凡夫としては上人の體は置場もなかつたのであるが、法華經の箱の中に限られた運命に心を奪はれ、大なる永遠の光りある運命に心を向けることを知らず隨て心が窮屈になつて丁度のである故に何うしても豫想以上の運命を開くには、本佛の大力に依頼せねばならぬ、然るに自己の小力に溝鑿飾を施し、凡てを支配せんとするから、少しもノンビリした處がない、故に吾人は宜敷上人の如き大なる信仰を羨望し、之を實生活の上に持來り、上人の信仰並に久遠本佛の力を自己に移し、法華の信力の中に身を没し、誠心誠意より南無妙法蓮華經を唱へたならば、些の若痛煩悶も無く、人世の凡ても解決せられ從客事に處して行けるのであります、譬へば私が此演壇に登るにも、御書を拜讀し講ずるに、自己の力のみを頼んで何の力かを巧みに傳へんとするならば、決して感動は與へられない、勿論出任せ

は云はないにしても、何となく心が落ち附かない、苦痛である、それだから自分の力では行くまいが佛陀の加被力に依らば多少に拘はらず必ずや或何等かの尊いものを諸君に傳へ得るものと信じ大に慰安がある。従つて心廣く體胖かなるの感がある、されば私のこの信仰この確信こそ、私をして淺薄なる演説をも、猶且つ從容として憶せず屈せず思入所を吐露せしむる次第である、どうか何れの職何れの地位にある人とを問はず、此上人の信仰を學んで、從容事に當るの心を訓練し日々に進歩し日々に向上せんことを偏に希望致して止ない次第であります。

(24)

は云はないにしても、何となく心が落ち附かない、苦痛である、それだから自分の力では行くまいが佛陀の加被力に依らば多少に拘はらず必ずや或何等かの尊いものを諸君に傳へ得るものと信じ大に慰安がある。従つて心廣く體胖かなるの感がある、されば私のこの信仰この確信こそ、私をして淺薄なる演説をも、猶且つ從容として憶せず屈せず思入所を吐露せしむる次第である、どうか何れの職何れの地位にある人とを問はず、此上人の信仰を學んで、從容事に當るの心を訓練し日々に進歩し日々に向上せんことを偏に希望致して止ない次第であります。

(完)



報道

（四十三年の東京教界）

顧みれば社會各方面に於て等しく大なる印象を與へたる明治四十三年は近年になき史料豐富の誠にてありき彼の皇國の天理理想を進めたる日韓併合の大變事を迎ひ亦學術的新發見の大洪水の慘状を呈するあり而して世は倍々盡榮盡智の風潮に流れて生活觀を叶びつゝ不良の徒真數を増し致て吾人をして之が解決を促すもの多々なりし也而して吾徒は這般病的現象に對つては覺醒救治の喚起角を與ふるに全力を傾注したりき彼の社會改善の事業や國民生活の問題に在りては徒らに外説形式の贅穎粉飾に意を注ぐと雖等其實績を擧げ得べきものにあらず要は其根底中心を確立して思想界の大刷新を爲すべきなり。

我東京教界に在りては四十三年一月より統一團本部を公會堂となし日蓮主義の本義に則り光明を社會改善の根底に發射し亡びざる國民

生活の中心を示し活ける日蓮主義の信仰を鼓吹宣揚して個人と國家との向上を促がせり而して未だ大なる効績の見るべき者なかりしと雖いかに僅々一年間にして純善の信仰を得て法悅の生活を爲しつゝある者多きを、試みに一年間に於ける當會室開闢の講演を示さん。法華經科聖語説講義 月四回(毎土曜日) 妙教新人會講演 月一回(十六日)

第一義會講演 日蓮主義青年會講演 月一回(第三日曜)

東洋大學橋香會其他講演 臨時開會

每會必ず本多大僧正の熱烈なる信念より溢れいづる千古未發の有益なる懸示指教を垂れらるゝを以て固を重ねることに建議者其數を倍し而ひもみな熱心に眞面目に求道の念を充たし何れも日蓮主義の本義を味識して思想健全光輝ある生涯に入りしな観るなり。

さるに本多大僧正は慶應早稻田大學第一高等學校に於ける日蓮研究會の招請に應じ就ゆる

△西村代議士の計 京都總本山妙法寺大僧正

にして京都南樂會議所會頭代議士西村治兵衛

氏は四十三年十二月十四日病を以て逝けり、同家は西京の名門にして詔く本山經營の爲に盡力し其一門本宗の信徒なり、氏遂に起つ能はざるを知るや病床に紙をのべて「常在不滅」の聖語を揮ひ之を額として佛廟に掲げしめ且つ「我自ら病人の模範となるべし」とて何等の煩惱苦痛を語らず、嗣子治一郎氏に「汝只至誠によつて將來を爲せ」と遺言し達焉逝去せられたりと云ふ將に各種の方面に於て其手腕を揮はんとしたるも遂に起つ能はざりしは遺憾なりと云ふべし、氏年未だ五十、十九日午後一時本山妙法寺に於て本葬式を行ふ、管長本多上人布教上の爲め歸山成り趣きを以て鎌倉大僧正の大師に次で、野口僧正、森川僧部、野老本山部長、近末山内僧侶十數名

會葬者には東京大阪名古屋地方より代議士實業家等の朝野知名の士無慮一萬、又仁和寺、金閣寺其他誠齋三十餘名ありて如何に氏の活動舞臺の廣きを知らしむ

翌十二日は總本山宗御會式の事とて近未各寺住職も參集し午後より大法要を最修せられ其より僧正は「日蓮上人の御魂」との題意ない

人生きては日本國中に身の置きなく遂には此地六條河原に腰刑に及び死して曾異教徒の墓手に追害せられさせ給ふあゝ是れ唯法國冥合實現の爲め也但惜無上道我不愛身命のため不事今是れ大苦を語れる拿摩を率ひ奉り

因に此は鑑三に對正要に於せられ、今回前
萬の報天聽に達し特旨を以て從六位を贈ら

のみ予は此の宗實とも國寶とも仰ぐべき御儀に對して宗実が多大の思ひを致さん事を切望

に聞き老本山部長の宗職身延退院に就ての
講話ありたり

卷之三

正及隨行員としての子は十月十一日京都高計
先に北陸地方の監督布教を了せられし能仁僧
久遠寺に於て大演説會を開きぬ降雨なりしに
も關らず各新聞市内廣告等行届ける事とて名
數の參聽者ありしは同寺として近來まれなる
活況なりき演題は鈴木孝鏡の「開會之辭」玉
現は「意匠的因果論」を修正は「法華經主義の實
現」なる題下に二時開幕に亘る大講演法益名
大也き

強き印象を興へられたるは子等の歎喜に基く
さる處也豈十四日前より市内各寺院に於て
修法後監督觀察を爲す

院總代として銀井乾外師の譲繼仁上人の所感演説ありて大に將來京都教界の爲に發展的布教方策に就て訓示せられぬ同日午前十一時四十分多數の僧俗男女に見送られて二條驛發舟波綾部に向ふ二時十分武説同寺總代人と共に出迎られた圓寺に入る午後七時開會鈴木本義は「活力なる佛教」を予は「日蓮主義」と將來の佛教」を警止は「宗教意識と道德の權威」(其一)なる題下に實在の佛陀と道徳發作の靈力にて二時間に亘て演説せられ翌日夜開演に開會鈴木鈴には「慈安の生活」を予は「故郷の

ものは凡てに向つて統一の見解を以てせすば
正しき信仰を把住するを得ざるを演べ鈴木師
は「正信とは何ぞや」と對正は「圓滿なる信仰
と圓滿なる本尊」を慙々と設示され同寺は
往昔より幾度法華と釋と宗内にては開法者の
多きを以て知られたる土地なりしに諸種の發
縁ありて寺檀圓滿を缺きさしも廣き本堂に兩
日共僅々四十餘の釋衆なりしは爲法遺憾に堪
へず十八日前後部出番同十時半國慶大乘寺
總代數名に迎へられ同寺に入る午後二時より
講演開始鈴木師「本尊の光明」を予す「圓滿
なる信仰」を當正は「活ける本尊」を淳々とし
て演述せられ將來信仰發展の曙光を認め得た
るは嬉れしく感じたりき十九日午前八時開部由
發保津下りの舞景を賞じゝ京都を通過して
木塚驛に着直ちに妙樂寺に入り同夜演説會を
開く鈴木師は「人生第一の寶」予は「統一の信
念」を簡正は「正しき本尊と正しき信仰」なる
題下に論述せられき廿日午前木津發保津に向
ひ同地常光寺の監督觀察を終了し其より宇治
なる草薙孤寺院直行寺の招に應じ同寺に日暮
杉本墨冠師の「開會の辭」鈴木師は「佛教とは

教界に對する將來の希望」僧正は「法華信仰の要義」を演述せらる廿四日午前十一時大阪成寺に向ふ住職及後代の出迎あり午後二時開會寺主提木師の開會の宣言鈴木師は「活力ある信仰」(其一)予は「日蓮上人の淨土說」其を僧正曰「信仰意識と道徳の権威」其二の題旨に約二時間に餘る大講演也き廿五日生玉堂寺に向ふ同寺には午後一時韓國併合紀念法會正講師の下に修法し三時より演説開會寺古谷養真師の開會の宣言予は「日蓮上人の淨土說」其二鈴木師は「活力なる信仰」其二を僧正は「信仰意識と道徳の權威」其三にて一時餘の講演法益甚大なりき廿六日午前九時多數信徒の見送を受け兵庫本宗布教所に向ふ信吉圓幸七氏は三ノ宮迄出向へられ同車して兵庫驛に下車上田布教所主任を始め多數信徒の出迎へた受け布教所に入り同夜演説公開予「諸法と總法に熟して僧正は「日蓮上人の教義」其二を題々として說不され湯印の新信徒八十五名終始合掌不動の姿勢いと尊とく感ぜられき翌廿七日午後二時說教會開會予は「此土安穩」の心を僧正は「本宗の安心」を說され聽衆男女感に打たれて涙禁せざるより乞ひ法益無盡なりき開教地としての兵庫布教所

は北陸巡教已來未だ見ざる熱烈主義の清宗予等うたゝ感嘆せざるを得ざる也。廿八日上田師始め數十名の信男女に見送られて出發し須磨明石のほとり常盤の松の色解けき海の美しさを賞でつゝ寶殿驛に下車直ちに妙信寺に向ふ午後より説教予は「釋法の心得」を簡正は「法華信仰の安心を企てよ」の題意に依て慈母の愛子に教ゆるが如くと懇切に説示され夜分は予は、本國土妙」を簡正は「日蓮上人の神觀」其三を二時間に亘て宣了せられ聽衆皆近きも二三里遠きは七八里より來り集まるもの約六十名其熱心なる信仰は頗母數惑ぜられき廿九日同地出發鷹城に向ふ當地妙立寺山主野老僧正は第一部監督布教として北澤道方面に巡教不在の爲め寺が代理妙音寺主野日會英師信徒總代率ひて出迎へられ立寺方丈に入同夜演説公開野日會英師は開會の宣言を予は「我本土安樂義」を簡正は「宗教意識と道德の權威」其四を二時間餘の長講演も講堂の聽衆一人の席を空すものもなく殊に有識者の參聽最も多かりしに我等をして一層の布教熱を興奮せしめの翌三十日早朝當地師範學校より明日講堂に於て日蓮主義講演を切望せられたるも双方の諸般の事情の爲め日を期して来る事に決せり以て如何に昨夜説演の反響の大な

増家達代の國難等あり甚だ豈異を極む。拜應者室外に満式終りて能仁僧正の「正法、善説真實」ありて國上の大難をばらふべし」と云々の聖訓によりて法話あり。次で一同紀念撮影を爲す夜は巡回布教師の爲め慰勞の宴宴を開いた。この間僅かに數日、而も其の法益實に顯著なるものあり、特に宗門の爲め賛賀すべきは他宗者の來聽頗る多さを見たる是なり、由來廣島の地たる「安樂門法」の勢力範圍にして其の陋やぬく可からざるものあり今や能仁僧正の熱烈なる講演と、信仰の威力とは能く其の陋と其の弊とな自覺せしむるに大功ありしと云ふべし、越えて廿八日同市新川揚町本國寺に向はせらる。同寺曾録三日間。晝夜説教と演説に努力、寧日ながりし。

◎廿八日午後一時より「超越的樂天生活」高木師、「信仰意識と道德の權威」能仁僧正。

◎廿九日「本傳の力用」高木本順師、「日蓮聖人の神觀」能仁僧正

◎廿日「日蓮聖人の國土觀」高木本順師、「聖日蓮を生合法學釋」能仁僧正

◎廿日午後には兩寺合併の有志懇親會あり。連日法懇親會として天地に光榮す。

◎十二月一日能仁上人を高木隨行員に從へ、

るがを知るに足る同日午後七時より妙善寺に於て開會寺主の「開會所感」を予は「國民生活と日蓮主義」を簡正は「日蓮上人の神觀」其三を各熱烈なる道念を披瀝して演了せり同日は明日の師範學校講演延期となりし爲め同校特に生徒の爲延刻を許したば聽衆の半數は同校正服正則の生徒を以て滿されたるは最も快心也き同夜三宅六藏氏中村祐七等と快談し翌日同地出發岡山に向ひ三十餘名の出迎へを受け一先づ簡正の自房に取引の長途の布教無難事結了佛祖諸天の加被深きを實感しね（隨行員、紀野波龍記）

岡山教信

第三部監督布教師能仁僧正一師は特別大演習の吉備の天地に空前の盛況を以て終了せらるゝや、廿三日午前六時、多數の壇信徒に送られて隨行員高木本順師を從へて岡山驛出發部内第十六部監督布教に向はせられたり。十二時牛廣島驛着、島田大橋驛口諸師及び多數の壇信徒に迎へられて松川町妙法寺に入る。妙法寺は數月以來原形改築中の所今回落成して成滿式を舉行せられしが簡正の御列席を得たるを幸ひ廿三日より廿七日に亘る五日間頗る盛

河原町第二弘通社に向はせらる。午後二時着、三時能仁僧正は「法華經の特長」に就きて説教あり、夜に入りて高木師の「四法成就」能仁僧正の「教神の本義」の講話共に大なる法益を與の聖訓によりて法話あり。次で一同紀念撮影を爲す夜は巡回布教師の爲め慰勞の宴宴を開いた。この間僅かに數日、而も其の法益實に顯著なるものあり、特に宗門の爲め賛賀すべきは他宗者の來聽頗る多さを見たる是なり、由來廣島の地たる「安樂門法」の勢力範圍にして其の陋やぬく可からざるものあり今や能仁僧正の熱烈なる講演と、信仰の威力とは能く其の陋と其の弊とな自覺せしむるに大功ありしと云ふべし、越えて廿八日同市新川揚町本國寺に向はせらる。同寺曾録三日間。晝夜説教と演説に努力、寧日ながりし。

◎廿八日午後一時より「超越的樂天生活」高木師、「信仰意識と道德の權威」能仁僧正。

◎廿九日「本傳の力用」高木本順師、「日蓮聖人の神觀」能仁僧正

◎廿日「日蓮聖人の國土觀」高木本順師、「聖日蓮を生合法學釋」能仁僧正

◎廿日午後には兩寺合併の有志懇親會あり。連日法懇親會として天地に光榮す。

◎十二月一日能仁上人を高木隨行員に從へ、

聽衆は裏間の民政講話の結果に由りて續々となる、「三寶の恩」高木本順師「日蓮聖人の教説」能仁僧正

大なる法蓮を設けらる。廿三日午後三時演説會開催、隨行員高木本順師の「實報莊嚴」の演題の下に演説あり終りて能仁僧正の「本傳の實在的信仰」に就て長時間に亘る講演あり、ついて夜に入りて説教あり、兼て廣島新聞には簡正の來廣を迎ふの記あり特別に生徒の爲延刻を許したば聽衆の半數は新規廣告、辻廣告等亦完備せしかば、聽衆甚だ多數なりき。即ち夜の演題は下の如し「信仰の目的」高木師、「合理的信仰」能仁僧正。明けて廿四日は午後一時より開講、高木師は「佛陀の愛子」能仁僧正は「佛の御心」に就きて講演あり夜は高木師「功德の源泉」能仁僧正は「感應的信仰」と題し熟諳なる講話あり、次て廿五日午後一時より高木本順師は「佛法は唯一味なるべし」と題し簡正は「佛子の自覺」と掲げて太だ有益なる教垂あり、夜は高木師「本佛の圓意」能仁上人「まとまりたる本尊とまとまりたる信仰」に就き説教あり。廿六日午後九時改築費寄附者先祖の供養法會あり、午後十六教部監督布教に向はせられたり。十二時牛廣島驛着、島田大橋驛口諸師及び多數の壇信徒に迎へられて松川町妙法寺に入る。妙法寺は數月以來原形改築中の所今回落成して成滿式を舉行せられしが簡正の御列席を得たるを幸ひ廿三日より廿七日に亘る五日間頗る盛

して來會するもの頗る多く、爲めに講堂狹隘なるを告げ席を増設すること三回に及ぶ。簡正の講演は益々多大の效益を施せり。

翌四日、多治比大雄寺に向ふ。午前十時寺主天崎海溫師の壇談に對する訓戒ありて安田臺城師登壇次で高木師の説教あり。最後に能仁僧正の懇意なる法話は信徒の懇意を以て拜尼せらる。此夜當寺に於て御講演ある筈なりしも吉田町民の熱心なる懇意によりて再び吉田町に引返されたり、蓮華寺に於ける講演如左

「本化的宗教生活」高木本順師「聖日蓮を生める法華經」能仁僧正一師

此回の講演は前回に比して其義大更に特筆べきものあり。聽衆過多の爲め遂に演壇を後へ移へと構へたり。講堂の聽衆は肅として聲なく無量の感化を與へられしものゝ如く、特に信徒は歎嘆胸にあふれて手のまひ足のふむ所を知らず途に本堂改築の議を速決せり。

翌五日午前九時同町製絲會社工女の爲めに訓話會を開かる。郡視學小早川氏の訓話に次で能仁僧正の有益なる訓話あり演壇左の如し精神の融通

同日午前十一時吉田町出發、井原高源寺に入らる時に午後三時同時御講演。

「信説の必要」高木本順師「まとまりたる信

活宗教七週年紀念號

本號に限りての讀者は一冊十五錢
毎月一回發行定價十五錢

| | | |
|--------------|----------------|------|
| 自我實現の新宗教 | 敬々 | 神代無 |
| 闡宗一致の實を擧げよ | 今後の宗教家 | 小笠原長 |
| 活宗教七週年號 | 活宗教七週年號 | 笠中智 |
| 元朝の自覺 | 元朝の自覺 | 林文學 |
| 回顧せしめよ | 醒めよ本化の宗徒 | 松橋 |
| 心經衰弱症に罹れる日本人 | 天照大神と日蓮上人 | 星藤 |
| 異體同心 | イツア物語に表はれし佛教經典 | 川清 |
| 年頭法語 | 隣仰崇拜の宗教 | 野水田 |
| 甘帶錄 | 吉田 | 鹽宮 |
| | 河智 | 素歸 |

月蓬山泉行牛佛一南光月邊

信行要典

再版

上製一圓並製六十錢(何れも郵稅四錢)
是れは御經の本ですが、從來の要品に一大發展を加へ
要文集に大改良を加へた者であります。ドンナ儀式
でも回向でも皆載せてあります。最も
信者方には最も適當な御經の本です。御妙判も澤山載
せてありますので毎朝違つたものが拜讀されます。最
早第一版も賣切れんとして居ますから早くお求
めなさい。

申込所 東京芝下高輪
取次所 五六
○須原屋書店、村上書店、森江書店、鴻臚社書店等に
御申込あるも宜し

活宗教社

取次所 府下桂原郡池上村
○下巻は一月末發行
和裝 一圓二十錢
送料 八錢

日蓮宗全書第四回刊行書

訂本化別頭佛祖統紀

上卷

上巻實價一圓三十錢
上下二卷二圓五十錢
○下巻は一月末發行

錢

宗門上下七百年歴史は幾回か轉じて文獻の今に存するもの甚矣斷片的碑銘行狀を外にして宗門の史壇
獨り統紀の一書あるのみ洵に史傳貧弱なる現時の宗門に別頭統紀の名は實に宗史の名なり宗門の史家
其の研究を此に發し考古家亦富贍なる資料を此に求むるも宜也本刊書は原著三十八卷を輯めて上下二
卷となし下巻尾には新撰年表數十頁を附して涉獵者の便に供する所あらん

科標 祖書綱要刪略

正議 合本

日蓮上人傳記集

宗門古傳中最正確のものは種を收む研究上の唯一典
據公準的史料也

目書刊既

錄內啓蒙

第一卷 安國論

祖書註釋書の白眉たる錄內啓蒙の翻刻にして條目標
科等閲讀の便利を加ふ

▲既刊書豫備残本あり希望者に頒つ ▲目

下缺員あり入會申込に應す ▲會報規則書

入用書は郵券二錢を添へ申込まるべし

日蓮上人金言集

簡易
聖典

慶弔進
物適品

祖興中金聲玉振の妙文を抜き之を忠孝修養信仰等の十
餘目に列らね信者には朝夕禮誦用とし無宗教者には大
聖の主義人格を知らしむ想かな付百頁非常
誠價
七錢郵稅二
錢百冊以上割引を許す附錄【日宗大意】新式の説明宗致瞭然表裝書
美禪高等施本として最も妙なり

日蓮宗全書出版協會

賣捌所

統

團

東京市淺草區北清島町十四番地

◎定價金五圓
殘本數十部

特價金三圓八拾錢
綴裝訂頗優美美術精巧寫眞版百十餘個箱入

日蓮門下には古來完全なる靈蹟書帖なし今其缺を補は
んか爲收る所の古刹名藍は最も美麗精巧なる寫眞版と
的確なる説明により現はざる一度之を繙かば聖祖一
代の偉徳を偲び靈威自ら起り宛ら實境を拜するの思あ
らん敢て一本を薦む

日蓮聖人靈蹟寫眞帖

全

旭日苗師題字
日蓮宗大學長
協田堯惇師題字
本多日生師題字
同講師
小笠原長生君序文
稻田海素師序文
秀明師編纂

恭賀新年

謹賀新年

新年之佳慶芽出度申納候

本多日生

謹賀新年

京都總本山妙滿寺

野老乾爲

銀井乾升

鈴木孝硕

川崎英照

森高貫

木義觀

英仁

照碩

碩仁

幹一

幹仁

能仁

仁事

一爲

顯本法華宗宗務廳
野口日主
井藤崎通咸主
三上義徹

賀正

顯本法華宗監督布教師

野口日主

能仁

仁事

一爲

恭賀新年

教學財團

顯本法華宗評議員

今成乾俊隨

恭賀新年

中田日達

謹賀新年 千葉縣山武郡布田藥王寺

山中木日乾會俊隨
井口善信叔

顯本法華宗大學林

今成乾隨

關田養日

千葉縣文學林

祝歲旦

齊藤海真親叔容淳

謹賀新年

當年は年始缺禮仕候

小笠原島擔任教師

吉塚通榮

恭賀新年

岡山縣和氣本成寺原田容廣

恭賀新年

兵庫縣明石町大藏谷圓乘寺

内藤日郎

恭賀新年

千葉縣

東京淺草新谷町慶印寺
東京品川妙蓮寺
東京品川

岡山文學生國友日斌

大阪梶木日種

正金澤紀野俊耀

正福井山名木信

正大坂梶木日種

正宇都宮木村義明

正岡山高田日暢

賀賀賀賀賀賀賀

正會津妙法寺住職
副住職竹板内本無日着桓

伯耆松崎
森田大横宮石白秋成
川久保
川山川井鳥葉島
寛日日會光寬開日泰

行城教章灑俊安虔行

新賀年

顯本法華宗宗會議員

中荻

原

照

日

俊

日

事

孝

圓

遵

量

智

義

俊

純

真

賢

乾

啓

玄

教

達

蘋

一

碩

正

碩

叔

誓

昌

應

雄

一

容

淳

信

門

謹而新春之吉慶

茅出度申納候

統一編輯局 同

謹賀新年

第一義會 妙教婦人會 講妙會

謹 賀 新 年

本山御用
各衣商

草木伊助本店
電話七百三十五九一、五五九一
振替口座一
市淺草區三好町二番地

用草木伊

電話七百三十五番
振替口座二一、五五九番



勤行作法

部毎に金二錢三十錢以下五厘郵券代
用不苦 振替口座東京一二一九號一國宛
即足(自俄局)王行昌題

前机●幢幡殿

御來店の節は陳
列場へ御來車被
下度是れ迄とは
一層勉強仕一切
各宗の佛具陳列
仕置候

附正價三法堂佛具發賣目錄

注

◎小賣部

同大橋西入三條
三法

三法堂佛具陳

陳列場

發行所

統

三

一
二

團